

## ブロンテ研究

### —Shirleyに見られるブロンテ姉妹の姿—

宮川下枝

Charlotte Brontë が *Jane Eyre* の次に出した *Shirley* は1811年から1812年に遡る英国内の労働者の生活、雇主の問題、両者の軋轢、闘争などをテーマとした社会小説であり、近代に至って社会批評家たちが注目するに至った作品である。この中に描かれる政治的、経済的、又宗教的な勢力というものは意義あるものと認めるようになったし、シャーロットの鋭い観察力は重要視されるに至っている。又当時のヨークシャー社会に於いては、ヨークシャー丘陵地帯におこった労働者と工場主との争いを扱いその地方性を重視する小説の故に人々に愛好され、その地方の人々の持つ素朴な率直さを示す故に評価されているのである。<sup>(1)</sup>

以上は小説のシャーリの序文に依るものであるが、私が興味を覚えるのはこの中に出る女主人公達の扱い方である。

.....

シャーロットがこの小説を書いて殆どあたり迄書いた頃、弟ブランウエルが死に、その三カ月後には頼りにしていた妹エミリーが肺を冒されて後を追ひ、更にその翌年には既に姉の病気に感染していたアンまでもが、遠いスカーボロの海辺で絶命した。これらを見送らねばならなかったシャーロットの気持は表明し難い程深刻なものであって、sense of desolation<sup>(2)</sup>と彼女自身述べている。この悲しみ、淋しさ、侘びしさをどのように耐えて行けばよいか。一度は筆を折った、この小説を書き続けることによるのみ、彼女は自分の苦しみを耐えることが出来たと云われている。いわばこの小説は、亡き弟妹達に捧げる鎮魂歌とも云うべきものであったであろう。父の眼の手術のベッドの側で看護をし乍ら *Jane Eyre* を書いたシャーロッ

ト、今又妹達の死後、勇気を振りおこしてこの *Shirley* を書き上げた彼女は実にブロンテ家のもつ不屈の魂を持った人である。

As she watched her sister Emily die, Charlotte decided such a character to her novel. Shirley Keeldar, she told Elizabeth Gaskell, was her idea of what Emily would have been "had she been placed in health and prosperity."

(3)

(エミリーの死を見守った時、シャーロットはこのような人物を小説の中で扱おうと決心した。彼女はギヤスケル夫人に語っている処に依ると、もしエミリーが健康で身分も高かったら、このようでもあったらどうかという像がシャーリ・キードラーなのである。)

騒々しい社会問題の多い時代に於いて、生きる価値を見い出そうとしていた二人の女主人公を描いている一人が、エミリーの化身 *Shirley Keeldar*、他の一人が妹アンを反映した *Caroline Helstone* である。このキャロラインの中にはシャーロットは親友エレン・ナッシーの姿も織りこんだとも云われているが、<sup>(4)</sup> 人間の孤独、女性の独立、結婚観、宗教性に迄及び考えさせられるものが多い。

苦しみを乗り切って書くうち、筆は後半に至ってすすみ、自分自身の創造の世界に、とっぷりとつかりこんでしまった。故に主人公達は最初に掲げた理想の旗印も見忘れ、女の独立も放棄して、ロマンスの中に我を忘れ、結婚という安住の地に落着いてしまう。

Robert Keefe も述べる通り

The resultant mixture of realism and romance is the greatest defect of the novel.<sup>(5)</sup>

(その結果として、現実とロマンが入り乱れているのがこの小説の欠点なのである)。視像力豊かな作者ではあるが、空想は余りにも現実からかけ離れ、前半と後半とは水と油のような様相を呈している。

まず荒筋を述べておこならば、父母の離婚又父の死によって孤児となった。キャロライン・ヘルストンは叔父 *Helstone* 牧師によって、経済的に

は不自由なく育てられる。だが遠慮勝ちのもの静かなこの少女は、自分の母は生きているらしいことを知って、知らぬ母への憧れを持っている。

村に工場主、Robert Moore がいて、いどこにあたるこの青年にほのかな好意を持っているが、主義が違うのだからと、叔父に交際を厳禁される。

引込み勝ちなキャロラインを叔父は連れ出し、一人の女性に逢わせに連れて行くが、それが、Fieldhead という大邸宅に住む地主の娘シャーリ・キールダーなのである。地主なきあとは彼女が土地のことに采配を振るい、才気煥発さを発揮している。控え目勝ちなキャロラインも、この美しい明るい女性にはすぐに心惹かれて姉妹のような仲になる。(6)

夜の闇にかくれて、工場襲撃の場を二人で息もつかずに見守る場面の描写など迫力があって見事である。(7)

こうした暴徒の動きを見抜いて策略をめぐらす村の牧師たちの描写も面白い。(8)

暴動は取り抑えによって治るが、ムアは弾を受け傷つく。ときばきと世話をしてくれたシャーリに彼はプロポーズするが、拒絶され彼は遠い旅に出る。

この間シャーリの邸には、遠来の Simpson 一家の訪問あり、賑やかに日が経っていく。このシンプソン氏はシャーリの叔父にあたるが、彼の来訪の目的は、若い財産家の身分もあり、教養高い Sir Philip Nunnely を連れて来て、彼女に結婚の相手として選ばせることであったが、常に自分より勝れた大いなるものへの憧れをもつ彼女は、断って叔父を怒らせてしまう。

そして彼女は常に自分を慕っていた、ロバート・ムアの弟 Louis Moore 氏と結婚することになり、キャロラインは心の中に秘かに思いを深めていた、ロバート・ムア氏と結ばれるに至った。

さていよいよ本論に入ることにしよう。

シャーロットは巧に妹二人の姿を主人公達の中に反映しているが、思わずシャーロット自身の姿を現わしてしまっているのです、敢えて「シャーリ

に見られるブロンテ姉妹の姿」と題した次第である。

(1) キャロライン・ヘルストンに見られるアン

姉シャーロットはキャロラインを妹アンそっくりの心やさしい、物静かな女性に仕立てている。

Miss Helstone was slow to make fresh acquaintance. She was always held back by the idea that people could not want her,...(Chapt. XII)

(ヘルストン嬢には、なかなか新しいおつき合いは出来なかった。私と友達になりたいと思っている人なんか無いわと思っては常に尻込みをしていた)。

Generally she was quiet and timid with him: very docile, but not communicative; (Chapt. VII)

(普通彼女はおとなしく恥しがり屋で、素直であり、おしゃべりではなかった)。

容姿に於いてもアンそのものである。

She is nice; she is fair; she has a pretty white slender throat; she has long curls, not stiff ones, they hang loose and soft, their colour is brown but not dark; she speaks quietly, with a clear tone; she never makes a bustle in moving; she often wears a gray silk dress, she is neat all over; her gowns, and her shoes, and her gloves always fit her. She is what I call a lady. (Chapt. IX)

(いい人よ。綺麗で。喉はきしやで白いし、捲毛は長くて軟らかなの。ゆるやかなその捲毛は黒い色ぢやなくて茶色よ。はっきりした声で静かに話すの。動く時もバタバタ音をたてたりしないわ。大抵灰色の絹の服を着ていて、服も靴も手袋も何でもきちんとしているの。ぴったりなの。貴婦人と呼んでもいい位だわ)。

牧師 Mr. York の娘が皆に話す言葉である。又シャーリの見たキャロラインは

Miss Helstone she fancied, had too pretty a face, manners and voice

too soft, to be anything out of the common way in mind and attainments...

(Chapt. XII)

(顔は綺麗すぎるわ、態度も声もやさしくて、心も仕草も並みはずれだわ)である。

私共はシャーロットの描いた、アンの肖像画を連想する。青い絹の服を着た、首の異常に細い透き通るように白いアンの顔を。

然しシャーロットはこのやさしい容姿の中に、しっかりした強いアンの心を表明していることを忘れてはならない。

And there must be no letter-scribbling to your cousin Hortense: no intercourse whatever. I do not approve of the principles of the family, they are Jacobinical." "Very well," said Caroline quietly. (Chapt. X)

(「お前のいところに手紙を書いてはいけないよ。どんな交際もしてはいけない。あの家族はジャコビン党で私の主義とは合わないのだからね」

「はい」とキャロラインは静かに答える。

At church only Caroline had the chance of seeing him, and there she rarely looked at him; it was both too much pain and too much pleasure to look: it excited too much emotion; and that it was all wasted emotion, she had learned well to comprehend. (Chapt. X)

叔父にロバート・ムアとの交際を止められたキャロラインは(教会だけが彼を見るチャンスのあるところであった。でも滅多に見上げることはしなかった。見るということは余りにも苦しく又余りにも喜びでもあった。感情がかきたてられてしまう。もうみんなすんだことだった。)アンも副牧師 Weightman にあつい念を抱いたことがあった。教会に於いて彼はアンの方をじっと見つめているのだが、アンは下をむいたままその視線には答えなかったということである。(9)

アンは病気が重なってから、最後の願いとして海の見えるスカーボロにねだって連れて行ってもらった。。切実なる海への憧れはキャロラインの願となっている。

I shall like to go, Shirley," again said Miss Helstone. "I long to hear the sound of waves—ocean-waves, and to see them as I have imagined

them in dreams, like tossing banks of green light, strewed with vanishing and re-appearing wreaths of foam whiter than lilies. I shall delight to pass the shores of those lone rock-islets where the seabirds live and breed unmolested (Chapt. XIII)

(「シャーリ、行きたいわ。」と再びヘルストン嬢は云った。「私、波の音がききたいの。太洋の波の音が。夢でみたようなあの緑の光に揺れる岸边・白百合よりも白い波のしぶきに消えたり結んだりする波の泡、海鳥が誰にも邪魔されずに住んで育ってゆく、あの淋しい岩場の側を通りたいわ。」)

(2) シャーリ・キードラーに見られるエミリー

Winifred Gerin の *Emily Brontë* の中にも、

Ellen Nussey described Emily as habitually kneeling on the hearth, reading a book, with her arm round Keepers; both recollections are confirmed by Charlotte's picture of Shirley...<sup>(10)</sup>

(キーパーに手をかけて、本を読み乍ら敷ものの上に何時もじかに坐っていたエミリーの姿をエレン・ナッシイは描いている。どちらの記憶もシャーリーの姿として、シャーロットは確認している。) とあり次の文が引用されている。

After tea Shirley reads, and she is just about as tenacious of her book as she is lax of her needle. Her study is the rug, her seat a footstool, or perhaps only the carpet; The tawny and lionlike bulk of Tartar is ever stretched beside her; (Chapt. XXII)

(午後のお茶のあと、シャーリは読書する。裁縫はなかなかしないが、本は離さない。勉強部屋と云へば敷ものの上であり、足おきのスツールが腰掛け代りであり、又じゅうたんの上でもあった。黄褐色のライオンのようなターターの巨体は、いつでも彼女の側にねそべっていた。

又本に熱中したエミリーは、別の時に於いては、男の子のように口笛を吹きつつ、ポケットに手を突込んで荒野を散歩したという。口笛を吹く姿は小説では次の文に認められる。

Presently she began to chirrup to the bird: soon her chirrup grew clearer; ere long she was whistling; the whistle struck into a tune, and very sweetly and deftly it was executed. (Chapt. XII)

(やがてチュツ、チュツと声を立てて小鳥に呼びかけ始めた。それがだんだんはっきりして、やがて口笛となり曲を奏で始めた。彼女はとても美しく巧に曲を吹いた。)

Shirley's soul craves heroic activity. She will try her utmost to become a man. (ibid.)

(シャーリの魂は、英雄的行動をとりたいと切望する。男になる為には、どんなことでもするだろう。)

They gave me a man's name. I held a man's position.' (ibid.)

(「皆は私に男の名を付けたのよ。だから私は男役なの。」)

これはシャーリにあり、シャーロットの中に潜む男性志向であろう。

'Captain Keeldar' と綽名される。

'yet soft fire in her eyes. (Chapt. XIII) 「でも眼には火が燃えているようよ。」 とキャロラインが指摘するのがシャーリの性格であり、「私は火と水のように。」 と云ったエミリー、自体の性格でもある。

自分も関心を持つ青年ロバート・ムアに対するキャロラインの恋心を疑って、シャーリは血相を変えてやって来て相手をなじる場面がある。

Shirley had already fixed on her a penetrating eye. 'No', she said: 'I shall see you are not in the humour for loving me. You are in one of your sunless, inclement moods.' (Chapt. XIV)

(刺すような眼つきで、シャーリはキャロラインを見つめていた。「いいえ。あなたは私に好意を持っていて下さらないわ。あなたは今暗い厳しい気持でいるのよ。」)

'I have pistols, and can use them'

'Stuff, Shirley? Which would you have shot—me or Robert?'

'Neither, perhaps—perhaps myself.—' (ibid.)

昨夜は二人でお帰えりだったわね。手をとって出てらしたのを窓から見ていたの、(さあ、私はピistolを持っているの。打とうと思へば打てる

のよ。)

「弾は入っているの？ どちらをお打ちになるの？ 私？ それともロバートの方？」

「どちらでもないわ。自分を打つわ。多分ね。）」

エミリーは父の射撃を見て成長し、自分も習ったという。

Shirley easily persuaded Caroline to go with her: and when they were fairly out on the quiet road, traversing the extensive and solitary sweep of Nunnely Common, she as easily drew her into conversation. The first feelings of diffidence overcome, Caroline soon felt glad to talk with Miss Keeldar. The very first interchange of slight observations sufficed to give each an idea of what the other was. (Chapt. XII)

(ジャーリはたやすくキャロラインを説き伏せて散歩に連れ出した。ナニイ共有地の広い淋しい原っぱを横切って、静かな道をかなり歩いた頃には、彼女はキャロラインを楽に話に引き入れた。キャロラインは最初の控え目勝ちな気持に打ち勝つと、キールダー嬢と話すのが嬉しくなった。一寸した意見を述べ合っただけで、相手はすぐ理解出来た。)

このようにエミリーが自分から相手に話しかける人であったかどうかは、疑わしいのであるが、妹アンを誘って荒野へ散歩に出た様子は窺うことが出来る。

Shirley said she liked the green sweep of the common turf, and, better still, the heath on its ridges, for the heath reminded her of moors: she had seen moors when she was traveling on the borders near Scotland. She remembered particularly a district traversed one long afternoon, on a sultry but sunless day in summer: they journeyed from noon till sunset, over what seemed a boundless waste of deep heath, and nothing had they seen but wild sheep, nothing heard but the cries of wild birds. (ibid.)

(ジャーリは云った。「この共有地の緑の台地、とても好きよ。その嶺の向うのヒースの丘はもっと好きよ。ヒースは荒野を思い出させるのですもの。スコットランド近くの国境を越える時荒野を見たことがあるわ。特に蒸し暑い夏の午後横断したあたりを思い出すの。昼から夕方迄旅行した



けど、眼に見えるものは、野生の羊だけ、耳にきこえるものは野生の小鳥だけだったのよ。)

荒野を愛したエミリーを彷彿させる。実際スコットランドへ山越えするあたりの一面のヒースの斜面は見事であった。

容姿の描写に於いても、シャーリはエミリーを思わせる。

Certainly it is Shirley. Who else has a shape so lithe, and proud, and graceful? And her face, too, is visible: her countenance careless and pensive, and musing and mirthful, and mocking and tender. Not fearing the dew, she has not covered for head; her curls are free: they veil her neck and caress her shoulder with their tendril rings. (Chapt. XIII)

(確かに、それはシャーリだ。他の誰がそんなにしなやかで、誇らしく、優美な姿を持っているだろうか。彼女の顔もはっきり見える。彼女の顔付きは無造作だが、考え深く、臆想的だが陽気で、嘲弄的だが、やさしさがある。露にぬれるのも平気で頭に何も被っていない。カールした毛はそよぎ、首を掩い捲毛となって肩にかかっている。)

又シャーロットは妹エミリーのもつ、大いなるものへの憧れをよく捉えている。『嵐ヶ丘』に於いてもキャサリンは「たとえ全地が滅亡してもヒースクリフさえ残っていれば、私は居続けるのだ。」と云うが、そのヒースクリフを通して表明しようとする大いなるものはシャーリに於いては彼女の尊敬するものとして語られる。

To admire the great was very much the bent of Shirley's soul. (Chapt. XII)

(偉大なものを尊敬するのは、まさしくシャーリの魂の性向だった。)

'Nothing ever charms me more than when I meet my superior—one who makes me sincerely feel that he is my superior.' (ibid.)

(私より勝れた人に出逢う時ほど心惹かれることはないわ。私より素晴らしいと心から思わせる人に出逢った時程ね。) とシャーリはキャロラインに告白する。

この性向は、おじシンプソン氏が身分も貴く、富裕で学問もあり、趣味

も高尚な若い青年紳士を彼女の結婚相手にと意図して伴って来た時も、この有望な結婚を断った時のシャーリの答の中に明瞭に表われている。

‘Never a man below me.’ (Chapt. XXXI)

と世俗的な財産、地位など見向きもしない。彼女の求めるのは唯心から尊敬出来る人ということである。シャーロットは、かくしてエミリーの気高い精神を読者に伝えたいと思った。

### エミリーと犬

このエミリーと犬のエピソードは、彼女の伝記でも多く見受けられるが、『嵐ヶ丘』の中にもエミリーはユーモラスな犬の様子を見事に描写している。

シャーリに於いては彼女の愛犬ターターが客に咬みついて、彼女がそれを落着いて処理するが、これはエミリーが自分の愛犬 Keeper がよその犬と大喧嘩をしているときいて、咄嗟に彼女のとった態度などを想いおこすと興味深い。

彼女は胡椒びんを手にとび出すと、犬どもの喧嘩の現場に駆けつけるや、二匹の犬の眼を目がけて胡椒をふりかけると、犬どもを引っぱたいてふり離し、呆然としてなす術もなく突立っていた男達を尻目に、物も云わず帰ったという場面である。(12)

シャーロットが妹達の死の悲しみに圧倒されて筆を中断したのは23章以後であったと云われている。(13)

### エミリーと自然

エミリーの自然への愛はシャーリにも現れている。Winfred Gerin も ‘Shirley loves Nature and Poetry.’

(シャーリは自然と詩を愛した。)として次の箇所をあげている。

If Shirley were not an indolent, a reckless, an ignorant being, she should take a pen at such moments; or at least while the recollecting of such moments was yet fresh on her spirit; she would seize. she would fix the apparition, tell the vision revealed. ...she does not know, has never known, and will die without knowing, the full value of the spring whose bright fresh bubbling in her heart keeps it green. (Chapt. XXII)

---

(もしシャーリが懶惰で、投げやりで、無智でなかったら、こんな時に、あるいは少くともこんな瞬間の記憶がまだ鮮やかに心に残っているうちに、ペンをとりあげるであろう。幻影を捉え紙に書き、心に浮んだ幻想を語るであろう。……わき上る輝く泉、それは彼女の心を若々しくし続けている泉の価値を十分に知らないのだ。)

### (3) シャーリとキャロラインに見られるシャーロット

シャーロットは女性の独立を夢みた自分の姿になぞらえて、シャーリを Manor House の女主人公に仕立てている。(第十二章)でてきばきと行動するのは、エミリーの姿を借りたのであろうが、雄弁に喋りまくるところ、滔々と自分の意見を人の前で述べる姿勢などは、シャーロット自身がとび出してしまった観がある。人嫌いなエミリーだったら、第十五章のように華やかに客の接待も出来なかったであろう。又妹のアンにしても、その小説アグネス・グレーに見受けられるように、自分の決心したことは断固として、決行する意志の強さはあったにしろ、<sup>(16)</sup> このシャーリ第二十三章に見るように、雄弁に論理的に相手を説得出来る人物ではなかった。雄弁は確かにシャーロット自身の姿である。エレンナッシーにあてた数多くの彼女の手紙にも見られる通り彼女は、はっきり臆せず自分の考えを述べる人であった。<sup>(17)</sup>

#### (1) 雄 弁

第七章のシャーリの言葉、第二十三章のキャロラインの言葉などは、妹の姿を借りたシャーロット自身である。

‘Of course, I should often be influenced by my feelings, they were given me to that end. Whom my feelings teach me to love, I must and shall love, and I hope, if ever I have a husband and children, my feelings will induce me to love them I hope, in that case, all my impulses will be strong in compelling to love.’ (Chapt. XXIII)

(勿論、私はよく感情に支配されますわ。その為に感情を与えられているのですから。感情が、この人を愛するように教える時は愛さなければならぬし、愛します。もし夫と子供が出来たとしたら、感情が私に彼らを愛するように導いてくれるようにと思います。その場合は、愛さなければならぬ程、衝動が強いとよいと思います。)

(四) 愛の悲しみ

だが一番切々と読者の心打つものは、シャーロットが思わず表明してしまう愛の悲しみであろう。深い心の傷を受けた自分の苦しい経験のあと書いたものだけに、ブラッセルでのヘガー師に対する報われぬ愛の苦悩は、ほとぼり出て強い印象を文に残すのである。

*an elegy over the past still rung constantly in her ear; a funeral inward cry haunted and harassed her: the heaviness of a broken spirit, and of pining and palsyng faculties, settled slow on her buyant youth. Winter seemed conquering her spring: the mind's soil and its treasures were freezing gradually to barren stagnation. (Chapt. X)*

(過去に対する哀歌は彼女の耳に今でも響いて来る。葬送のもの悲しい内心の叫びがやむことなく彼女を苦しめる。失恋の重さ、鬱々として痺れたように衰えていく心身の機能の重苦しい澁みが、華やかなるべき青春の日々を埋めていく。冬が彼女の春を侵してゆくように見える。豊かな心の土壌と芽生えた美しい花は凍って、次第に不毛のけだるさに凍りついていくように思われた。)

諦めの場の描写も見事である。

キャロラインの病床に医者と呼ばれる。

*He examined her. He discovered she had experienced a change at any rate. Without his being aware of it, the rose had dwindled and faded to a mere snow-drop; bloom had vanished, flesh wasted; she sat before him drooping colourless, and thin. But for the soft expression of her brown eyes, the delicate lines of her features, and the flowing abundance of her hair, she would no longer have possessed a claim to the epithet-pretty.*

(医者は彼女を診た。とにかく、ある心の変化を経験したことを診てとった。気も付かぬうちに頬のばら色はあせ、雪割草のようにしをれてしまい、蕾の美しさは失われ、やせ細って、うなだれて彼の前に腰を下ろしていた。茶色の眼のやさしい表情、繊細な顔の線がなかったら、とても綺麗だとは云えなかつたらう。)

‘Oh! I shall be wholly forgotten when they are married,’ was the cruel succeeding thought. ‘Oh, I shall be wholly forgotten! And what-what shall I do when Robert is taken quite from me! (Chapt.XIV)

(続いておこった無惨な考えは、「ああ、あの二人が結婚したら、私は完全に忘れられてしまうわ。」ということだった。「あ、私は忘れられてしまう。ロバートがすっかり奪い去られたら、私は一体、どうしょう? どうしたらよいのだろうか。)])

Most people have had a period or periods in their lives when they have felt thus forsaken; who, having long hoped against hope, and still seen the day of fruition deferred, their hearts have truly sickened within them. This is a terrible hour, but it is often that darkest point which precedes the rise of day: that turn of the year when the icy January wind carries over the waste at once the dirge of departing winter, and the prophecy of coming springs. (Chapt. XX)

(大抵の人は一生のうち何時か、見捨てられた、と感じる時期のあるものである。長い間期待に期待をかけ乍らも、結実の遅れを見て、彼らの心は全く絶望に閉される。恐しい時期だ。しかし屢々それは、夜が朝になろうとする時の闇の一番深い時でもあり、荒野の上の冷い一月の風が去りゆく冬の哀歌を告げ、春の来訪を予告する時でもある。)

#### ハ) 人生観

女として独立した歓びを見出す為には、何をすべきかと考えたシャーリーは、人に尽すこととの結論から、自分の財産を貧しい教区の人達に施すことと考えて、教区の牧師達を呼び配分するが、結局はもっと欲しいとねだ

られて、腹を立てて席を立ち、皆にさあお引き取り下さいと庭の裏木戸を示す。“am I an automan?”<sup>(18)</sup> 私は機械ではない。血の通った人間だと、ロッチェスターに迫るジェーン・エアと同じく、これはシャーロットの男性と等しく独立が欲しいと願うシャーロットの願いであろうが、結局は奉仕生活の中に生き甲斐を見出すことも出来なければ、奉仕に尽す人々の生活を肯定することも出来ない。<sup>(19)</sup>

But hard labour and learned processions they say make women masculine, coarse, unwomanly (Chapt. XII)

(激しい労働や、智的職業は女を男っぽく、ひからびさせ、女らしくなくしてしまう、と皆が云うわ。)と逃げ、

Question the existence of meaning at all in the life of an uamarried woman.<sup>(20)</sup>

(結婚しない女の生涯には、何の意義があるのだろうか。)と疑問を持ち、人生の目的、よろこびは結婚生活に入ることによって達せられると結着付けるのも、この小説を書いた時シャーロットは既に三十二歳で、人生のある種の空しさを味っていた時だから当然かも知れない。

‘When people love, the next step is they marry,’ was her argument. (Chapt. VII)

(「恋愛したら、次の段回は結婚することよ。」というのは彼女の議論であった。)と書いているが、これはキャロラインの論というより、シャーロット自身の回答であろう。

## (二) 家庭教師意識

この小説の中には、家庭教師意識というものが顔を見せていると、Professor Brigg も述べているが、『ジェーン・エア』のように全面的に家庭教師を主人公としてはいない。シャーロットはこの小説では、家庭教師の問題に触れるのは避けようとしたのであるが、それにも拘らず彼女の根底に潜むその経験は上流階級への反感・雇われ人意識として心ならずも浮び上る。

シャーリもキャロラインも家庭教師をしょうかと話す場面もあるし、<sup>(21)</sup> 又 Pryor 夫人が自分の娘に自分の過去を話すあたりにも表われる。上流階級の傲慢さ、自分の地位に甘んじなければならぬ雇われ人の“屈辱”など、家庭教師となったが為に自由に振舞えなかった自分の不幸を嘆く。<sup>(22)</sup>

#### (4) 宗 教 性

最後にシャーロットの描く宗教的雰囲気を用いて終りとしよう。何もこの宗教的描写はシャーロット独特のものではない。ブロンテ姉妹にはそれぞれ宗教性があって、皆、書き方も又解釈も異なるのであるが、シャーロットは彼女なりに美しい教会礼拝の描写などを行っているのに眼を通してみたい。

Caroline was a Christian. therefore in trouble she framed many a prayer after the Christian Creed; preferred it with deep earnestness; begged for patience, strength and relief. This world, however, we all know is the scene of trial and probation. (Chapt. XX)

一番信仰深かったとされるアンに対しては、キャロラインの信仰として讃えている。

(キャロラインはキリスト教徒であった。困った時にはキリスト教信条に基いて祈りをした。深い熱心さを以って、忍耐・力・慰さめをお与え下さいと。でもこの世は試練の場であることも私共はよく知っています。)

又ブロンテ家で毎夜なされたという、家拝の状況も次のシーンに見ることが出来る。

Part of the evening church service was the form of worship observed in Mr. Helstone's household: he read it in his usual nasal voice, clear, loud, and monotonous. The rite over, his niece, according to her wont, stepped up to him. 'Good-night, uncle.' (Chapt. VII)

(教会礼拝の夕拝の一部は、ヘルストン氏家の家拝の形でもたれた。彼はいつもの通りの鼻にかかった、陰気な、大きな単調な声で聖書を読んだ。習慣通り儀式が終ると彼女は側に行き、「おじ様、おやすみなさい」と云った。)

そして最後に美しい教会礼拝の場をあげておこう。

まだ肌寒い春の宵、教会からは讃美歌の歌声が響いて来る。木に囲まれた牧師館、それを取り巻く芝生の庭が美しい。

Briarfield lay scarce a mile off; its ham was heard, its glare distinctly seen. Briar-chapel, a large, new Wesleyan place of worship, rose but a hundred yards distant; and, as there even now a prayer meeting being held within its walls, the illumination of its windows cast a bright reflection on the road, while a hymn of a most extraordinary description, such as a very Quaker might feel himself moved by the spirit to dance to, roused sheerly all the echoes of the vicinage. The words were distinctly audible by snatches; here a quotation or two from different strains; for the singers passed jauntily from hymn to hymn and from tune to tune, with an ease and buoyancy all their own:— (Chapt. IX)

(ブライアフィールドのまちは、一哩とは離れていない。まちのざわめきもきこえる。まちの灯もはっきり見える。ブライアの教会、大きな新しいウエズレー派の礼拝堂は僅か百ヤードの距離に立っている。今も中では祈禱会が行われているので、窓のあかりは明るい光を窓の外の道に投げ、クエーカー教徒の信者でさえ踊り出したくなるような、異様な讃美歌が近所の木の魂を起してしまった。人の声も時折ところどころははっきり聞えて来る。いろいろな調べを一つ、二つ拾ってみるならば、歌い手たちは讃美歌を次から次へと、楽しげに、独自の自由奔放な調子で歌いまくっている。)

細かい描写である。ハワーズの樹に囲まれた丘の上の教会、ブロンテ姉妹達の住んだすぐ近くの牧師館のあたりが眼に浮ぶ。

以上、シャーロットは自分自身の姿をしやしやり出し乍らも、妹エミリーとアンの姿を写つて来た。又既に述べた通りに、現実とロマンスとが折り重り、前半と後半ははっきり分離してしまったような欠点があるとしても、弟妹達の相次ぐ死の悲しみに耐えつつ、気高いエミリーの姿を現わそうとして必死に書き続けた努力は大いに買いたいものである。



註

- (1) *Shirley* の Introduction より (IV. V. VI) 概略)
- (2) " " ( III )
- (3) Gaskell: "*Life of Charlotte Brontë*" p.279
- (4) 阿部知二: プロンテ姉妹 p.165
- (5) Robert Keefe: *Charlotte Brontë's World of Death* p.132
- (6) *Shirley* ch. 12
- (7) " ch. 19
- (8) " ch. 18
- (9) Winifred Gerin : *Anne Brontë* p.184
- (10) Winifred Gerin: *Emily Brontë* p.156
- (11) " " p.95
- (12) " " p.108
- (13) Robert Keefe: *Charlotte Brontë's World of Death* p.134
- (14) Winifred Gerin: *Emily Brontë* p.236
- (15) " " " " p.235
- (16) Anne Brontë: *Agnes Grey* (ch. 20)
- (17) Spark: *The Brontë Letters*
- (18) Charlotte Brontë: *Jane Eyre* (ch. 23)
- (19) *Shirley* (ch. 10)
- (20) Robert Keefe: *Charlotte Brontë's World of Death* p.134
- (21) *Shirley* (ch. 12)
- (22) " (ch. 24)